

くりに務め、二度と轍を踏まぬことを誓い、ご冥福をお祈りいたします。

シベリア抑留への道程

新潟県 森 肇

シベリア抑留への道のりの発端は、昭和二十年八月九日のソ連軍の参戦であった。当時私の所属する部隊は旧満州国と内蒙古との国境に近い通遼に駐屯しておった。私は、ソ連参戦の八月九日の前後のある日、重大な命令を受けた。三十五人ほどの仲間とともに隣の駅双遼で任務達成の器材や糧秣等十分な準備を整え、満州国の西北部にあたる白城子に向かって出発しました。チチハル方面から邦人乗せ、交差させた日の丸を機関車の両面につけて、引き揚げの最後の列車として我々の待つ場所に到着した。この引き揚げ列車を付近に待たせ、任務を遂行してはその列車で奉天に向かって南下しました。第二、第三の任務を遂行しながら

同年の八月十五日に奉天に帰ってきました。

途中の小さな駅で、老人の男性三、四人と女性、子供合わせて二十五人くらいの邦人が着のみのままですつ来るとも知れない列車を待つ一団に会った。男性の一人が私のところへ来て、列車に乗せてください。どうか助けてくださいと言いました。私はなんらちゅうちよすることなく、最後の引き揚げ列車であること

を知らせ、同乗させて奉天まで一緒に来ました。同乗した邦人から、八月十五日戦争は終わりました、そして負けましたと聞かされました。余りの驚きで、まだ半信半疑の気持ちで聞いておりました。子供たちは安心したのか、これまでの疲れと寝不足のためか、すやすやと眠る姿を見て、同乗させてよかったと思っております。仲間から軍用列車に一般人を乗せたとは非難する声もあったようだが、あの当時の人たちは今どうしておるだろうか、思いを寄せております。

私たちの本隊は奉天の飛行場に駐留しておったので、司令部で報告を済ませ、終戦を確認して本隊と合流しました。いよいよソ連軍による武装解除の日が近

づき、部隊長を囲んで将校だけで解除に応ずるか否やについて相談し、応ずることにして、その旨部隊全員に説明をしました。その夜のうちに仲間の一人が自殺をし、またある軍曹の率いる五人ほどの仲間が部隊を離れていった。元気で日本に帰ろうと暗やみの中で互いに手を振り別れたあの様子が今、目に浮かんできます。我々のいた奉天飛行場に日本の軍用機が二機おつたが、ソ連機一機が着陸すると同時に二機が飛び立ち、一機は急に降下して自爆し、残りの一機は日本の方向へと飛び去りました。果たして日本にたどり着いたかはわからないが、余りにもたどりし運命の違いに言いようのない思いで、自爆した飛行士に合掌するのみでありました。

武装解除された我々には北陸大学へ集結を命ぜられ、千人ずつの作業大隊に分けられ、我々の部隊も二つに分けられてしまった。

九月十五日、ハルビンで三か月の鉄道工事をしてウラジオストックから帰国するとの報告が流されており、我々にはその報に一縷の望みを託して貨車に

乗り込みました。どのくらいの時間が過ぎただろうか。ハルビンが近づいて来たが、何ら下車の準備の指示が来ないのに不安と動揺の色が見え始め、やがてハルビン駅に入るも一向に停まる様子もなく、一気に通り過ぎてしまった。やがて松花江の鉄橋を渡り切ったところで後方の貨車から一人、二人と走る列車から飛び降りる者が出てきた。それをねらい撃つソ連兵の小銃、堆肥の間をうまく逃れていく仲間の足元で土煙を上げる小銃弾、貨車からこの光景を見ておつた我々は、ただ無事に逃れてくれとひたすら祈り続けた。どうやら無事に全員逃れ得たようでありました。

ついに満州の最北端の町黒河に到着した。対岸はソ連領ブラゴエシチェンスクである。いよいよシベリアへの玄関口まで来てしまった。

黒龍江の岸辺で十日間くらい天幕生活を強いられた。北満の秋は冬を思わせる。朝夕の寒さはことのほか身にしました。

ブラゴエシチェンスクでも天幕生活であった。ある晩のこと、私の枕元へ近づく足音が聞こえてきた。い

きなり天幕の下から手を入れて私の全財産の入った背負い袋を盗もうとしたのでした。とっさにそれをもぎ取ってしまったが、もし盗まれていたら、これから極寒のシベリアに向かつて着のみのままの私になるどころでした。ひとり安堵の胸をなでおろした次第でした。危機一髪の出来事でした。

本当にウラジオストックへ向かうのだろうか。それともシベリアの奥地へと向かうのだろうか。迷える小羊のように全く自分をつかめない毎日であった。再び列車に乘せられ、東に向かえばモスクワ方面、どちらへ向かうか車内の関心事であった。扉は固く閉ざされており、毎日が暖房を囲んでのシラミ取りで明け暮れておった。首筋を手のひらでなでると、手のひらいっぱいシラミ、もつとも出発してから幾日たったか、一日も体を洗ったこともない。下着も着替えていないので、シラミも満足だったろう。

小さな駅の付近で列車が停まった。車内で死亡した仲間を降ろして線路の側に埋め、再び列車は動きだした。一体身元は確認されているのだろうか。復員した

だれかが留守家族へ知らせることができたらうか。多くの仲間の埋葬地であれば遺骨収集も可能となるであろうが、ただ一人の埋葬地は忘れられてしまうだろうし、ソ連人自身も関心のない埋葬者になってしまう。異国の地で眠る六万人余りの死亡者の中にこのような人が他にもおるだろうが、シベリア抑留のもたらす悲劇ははかりしれないものを感じる。走り続けたある日、扉が開けられた。十月も中旬を過ぎていたろうか、見渡す限りの冬景色であった。日本ならようやく秋も深まりいくころなのに一面雪とは、シベリアの厳しさを思い知らされた。さんさんと照りつける太陽のもと、雪の上で思う存分新鮮な空気を吸い、雪で顔を洗うなどして、生き返った思いをしました。

やがてバイカル湖畔に停車した。南北六百四十キロ、幅の広いところで八十キロ、透明度世界一の湖、まるで海としか思えないバイカル湖、我々の列車はさらに西へ西へと進み、ノボシビルスクから南へと下り、セミパラチンスクから東南に向かい、着いたところが、小さな鉱山町ヴェロウソフカであった。

九月十五日に奉天を出発して、ここに着いたのが十一月四日、実に五十日近いシベリア抑留への長い長い道程であった。

シベリア抑留記

新潟県 若月 太郎兵衛

ソ連人について

人なつこく純朴で、親切ですぐ仲よしになれる人がほとんどでした。物事にあまり頓着しないおおらかな面は我々島国根性と対照的です。見習うべきだと思いました。中には悪い人もいました。それは言葉が通じないため、理解できずガミガミ怒声を張り上げるといったたぐいのものでした。日本人を理解することによって尊敬する者もありました。

みな人間は同じなんです。彼らはドイツとの戦いでひどい目に遭いました。戦争はこりこりだ、平和を望む心は人一倍強いと思いました。社会主義の下では、

国がすべて最低生活ではあるけれど保障してくれま
す。生まれてから墓場まで、子育て、教育「無償」、
就職、年金「無拠出」、病氣「無料」、住宅「ただ同然
の低家賃」、税金「ほとんどない」、バス汽車賃「ほん
の少し」、結婚「自由人種も含めて」、明日の心配は要
らない。以上のような仕組みになっているため、極め
てのんきムードになってしまう。せかせかしくなくても
暮らしていける。我々がノルマをあげるのに頑張って
いるのに、彼らについて行かれないから、ゆっくりや
れとブレーキをかける。まるで反対現象なのです。監
督に怒られない程度にやっているのがコツなんだっ
て。考えない、動かない、しゃべらない、なんです。
福祉の面はすばらしい先進的なものです。生産の面で
はよいアイデアも生まれて来ません。何でも政府まか
せ、生産も上がらない。

政府は人民のエネルギーをあらゆる面に燃え立たせ
る政策をやらす、もっぱら権力にしがみつくことばか
りに終始してきたのだと思います。

彼らは日常のざれごとやいたずら話は大いにはしゃ